

〈短歌〉

— 全体講評 —

へ玄関の隅に春待つ杖のあり風押して行く夫の容体見にへの一首の発想が良かったにも拘らず選外になってしまいましたので一言。結句を「夫を見舞いに」とすれば七音で収まりましたね。季節の春と夫の全快への願いが籠もる「春待つ杖」の詩的な表現が生かされず残念でした。一首を生かすも殺すも結句の力と痛感した短歌でした。

このように表現の不足は添削で補えますが発想は作者の独自のものです。月並みな結論ですが、何を如何に詠うかということが一首の要となると思います。この世界の数多の事象から何を選択して歌にするか、日頃から、ひとつ短歌に限らず様々の芸術作品などに触れて感覚を磨くことで得られるもので、更に生き方にも繋がってゆく姿勢だと思います。

長澤 ちづ

【最優秀賞】

胸元に抱へきれない漣の放つ光をこぼしゆく鴨

高橋 敦子

— 講評 —

透明で豊かな詩の世界が広がる。「きれない」や「こぼす」の過剰を表す語が、この短歌では効を奏して豊かさへと導く。水辺という場の設定も透明感へといざなう。

【優秀賞】

消しがたき過去と思へばアルバムもしまい置きたり旨しいの今も

熊谷 うめ

— 講評 —

過去を写真で振り返ることは叶わない現在だが、アルバムを処分できない心情が切々と伝わる。人生への哀惜は周囲の人々への感謝の念でもあろう。結句の収め方が巧み。

【優秀賞】

受験する少女暗記の声ひびきばあばも合せる枕草子

小林 宏子

— 講評 —

健やかに育ち受験期を迎えた孫への愛が込められた一首。「ひびきばあば」を中心とした濁音が、孫歌の甘さを救う役を果たす。更に「枕草子」が利発な少女像を立ち上げる。

【優秀賞】

氷山が解け水位増す海水はきつと地球の涙なんだね

長谷部 誠一

— 講評 —

目先の快適な生活が優先し地球の温暖化は益々深刻化する。そんな現状の打破を「地球の涙」と擬人化して訴える作者。詠う素材を社会問題に求めた点を評価したい。

《俳句》

— 全体講評 —

昨年は兼日題「平成」で作品を応募戴きましたが、本年は自由におつくり戴く事になりました。ご高齢の方が多かったようで、より個性的な作品が集まった気が致します。作品と言う場合、ある歌人の言を借りるなら、「作品と作者は不即不離の関係にある」と「作品は作品として自立するので、作者の人生とは関係がない」という考えがあります。従って、このどちらかの中で個性が発揮される事になります。どちらにしても作者が滲み出るでしょうが、俳句を詩と考える場合、後者に近づきたいものです。私は、「俳句は対象の真実を印象として表現する詩」と思っております。今回の応募作にも詩の魅力的表現が多く見られました。皆様の作品に励まされました。有難うございました。

梶原 美邦

【最優秀賞】

冬茜ポトルシップの中の風

八木 せいじ

— 講評 —

茜は赤根。根から採る染料。冬茜は冬夕焼。窓際の素敵なウイスキーの瓶の中に夕焼が忍び込んで、浮かぶ船を染めると、瓶の中の海が一面に風いでいった。

【優秀賞】

かわせみの値踏む浅瀬や鮎の影

釜谷 徹男

— 講評 —

翡翠が川へ突き出している古木の枝に停まっている。空飛ぶ宝石と言われている鳥。静けさの中で鋭い眼が獲物の品定めをしている。鮎が近づいてきた。

【優秀賞】

海色に街の暮れゆく弥生尽

熊谷 うめ

— 講評 —

弥生はイヤオイ。ますます草木が生い茂るの意。三月、港町は海の明るさに、暮れなずむ。空に反射する藍色は、そのまま街を染め上げて、暮れてゆく。

【優秀賞】

世論揺れ原発揺らす蜃気楼

坂野 光成

— 講評 —

地震に襲われる度に原子力発電所の放射能が心配になる。化石燃料も大気を汚染する。クリーンな風力がよい等と世間は蜃気楼の風景が揺れる様に揺れる。

【優秀賞】

春疾風子ら追う声もちぎれ飛ぶ

志賀 久一

— 講評 —

西や南から吹く、強い風の中。親の心配げな声が追いかける。風がやむ間も子を追いかける声。子は面白がって逃げる。又、突然の風に声が千切れて飛んだ。

【優秀賞】

冴返る医師は一語の間をおきて

高橋 眞也

— 講評 —

何処か気になる事があり、医師の診断を受けた。結果を述べる段になって、医師の口元に一瞬言葉が問えた。全身に寒気が奔るのを感じて狼狽して終う。

【優秀賞】

冬銀河奥歯で砕く金平糖

露木 君江

— 講評 —

冬空には先ず昂が、そしてオリオン星座が大気の澄みにすむ中、鋭く美しい光を放つ。口中の幾つもある砂糖菓子星を星にみとれて思わず奥歯で砕いた。

【優秀賞】

里帰り障子まぶしき目覚めかな

前田 久美子

— 講評 —

故郷に帰った。実家は伝統的な建築様式で、外から雨戸、次が廊下、そして障子の部屋である。兄が雨戸を開けたのだろう。懐かしい障子の明るさに目覚めた。

【優秀賞】

本殿にスプリングラー神迎へ

横山 裕

— 講評 —

陰曆十月一日に全国の神々は留守番を残して、出雲にゆく。運命や縁や天気等の会議をし、月末に帰るといふ。人間は環境を整え、丁重に「神迎へ」を行う。

《川柳》

— 全体講評 —

川柳は課題と雑詠に分けて詠みますが、今年の募集は「自由吟」なので自分の思いを好きに詠むことができます。何を詠むか迷う場合、体験のあれこれを記憶の引き出しから小出しして、日頃感じている腹の立つこと、嬉しいこと、悲しい・寂しいこと、辛いこと等々リズムに合わせて仕立てましょう。上五の字余りも出来るだけ避けて、十七音に纏めると句姿が整います。定型で収まらぬ場合は、類語を探し、句意に違和感がなければ入れ替えると、すっきりとした句になります。今回は字余り・字足らず、など推敲の手抜きや同様の句も散見されました。作品は余裕をもって取りかかり、再度見直すと良いでしょう。川柳に振り仮名は要りません。ご注意ください。

荻原 美和子

【最優秀賞】

解放へ動かぬ拉致の身を案じ

— 講評 —

北朝鮮の工作員により拉致された多くの日本人が未だに解放されていない。肉親の帰りを待つ家族の思いはいかばかりかと思う。解決の糸口が見えぬ寒い現実。

東 哲子

【優秀賞】

百歳へ若さ漲る好奇心

— 講評 —

百歳を視野に入れた元気な作者。年齢を重ね好奇心が旺盛で、若々しくお洒落な人柄が浮かぶ。「若さ漲る」の表現も巧みで、下五とうまくマッチした。

斉藤 一步

【優秀賞】

ダイエット今年こそはと神頼み

— 講評 —

女性ならダイエットをしたいと思うだろう。何度も失敗をして、今は神頼みしか残っていない様子。本気度は分からぬが、神様もお手上げの頼みことだろう。

田中 康子

【優秀賞】

禁酒中ときおり忘れ虎になる

— 講評 —

酒好きの夫を妻が詠んだと解釈した。どちらにも受け止められないだろう。上五で興味を引き、中七でおとぼけを見せ、下五で困らせる表現が笑いを誘う。

林 宏子

【優秀賞】

温暖化少女の危惧がつきささる

増田 千賀子

— 講評 —

十六歳の少女グレタさんが気候の危機を訴え、温暖化対策に消極的な大国に涙の講義をしたのは最近のこと。日本の対策もはつきりと見えず、気掛かりな日々。